

# 会 議 録

日 時	令和2年8月18日(火) 14:00～15:45
場 所	総合文化センター 講堂
件 名	令和2年度 第3回社会教育委員会定例会
出席者	社会教育委員：有賀秀雄、小栗正敏、安藤隆宏、山田秀樹、酒井周文、安藤徳善、岩島留美子、 小木曾恵美、伊藤孝一、浅沼克郎、牛島正治 県関係者等：長屋メイ子（岐阜県生涯学習企画監）、安藤由美子（岐阜県生涯学習課課長補佐）、 原賢志（東濃教育事務所教育支援課課長補佐） 市関係者：小栗茂（中央公民館長） 事務局：工藤剛士（社会教育課長補佐）、野田祐作（同主査）
議 題	<b>1 挨拶</b> 有賀 秀雄 代表 新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴う自粛ムードに、連日の酷暑が加わることで、ますます外出しづらい状況が続いている。体力づくりや健康の維持管理など、皆さんも体調には十分気をつけ、この夏を乗り切っていただきたい。 本日配付された「東濃社会教育だより」では、地域ボランティアをはじめ、各地で展開されている活動の様子を知ることができた。いずれも、「子ども達のために」が一つの合言葉になっているように感じられる。なお、現在、県や国が強力に「地域学校協働活動」の推進を図っているところであるが、本誌に掲載された活動もその範疇で捉えるならば、公的な施策に先行する形で地域と学校の自主的な連携が進められている具体例だと言う事もできるだろう。 先日、ある学校の現役校長先生とお話しする機会があったが、「登下校の見守り等」をお手伝いいただくスクールサポーターの募集を行ったところ、50名を超える申し込みがあったとのこと。地域と学校の良い関係が築かれていた、という前提があったからこそのお話だとは思いますが、このような両者の友好関係を作りだし、維持するための仕組み作りを考えることも、瑞浪市社会教育委員会が目指す方向性の一つだと考える。 本日は、岐阜県及び岐阜県教育委員会の関係各課から、地域と学校の協働推進に取り組んでおられる3名の職員にお越しいただいている。また、講師をお勤めいただく廣瀬隆人先生とはオンラインでつながっている。廣瀬先生は、昨年度に岐阜大学で開催された「コーディネーター研修」でも講師を務めておられた方であり、「地域学校協働活動」の実現に向けて、市民の積極的な意識や、取り組み姿勢を引き出すことの必要性を訴えるお話が大変印象に残っている。今後瑞浪市にて「地域学校協働活動」を推進するにあたって、沢山のヒントをいただけるのではないかと期待しているので、しっかりとお話を聞いた上で、これからの活動や研究に役立てていきたい。 <b>2 研修</b> 講師：廣瀬 隆人 氏 一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事 講演：14:20～15:20 質疑：15:20～15:25 テーマ「地域学校協働活動の推進に向けて」

## 概要

- ・ A I 技術の革新により、今後 20 年間に既存の仕事は半数近くが自動化し、機械にとって代わられると言われている。かつては、どの町にも存在していた小さな商店が姿を消していったように、時代と社会の変遷は、日ごろ認識するよりも遥かに急速に起こっている。よって、子ども達の教育や地域社会を考える際には、常にその未来予想図を描きながら取り組まなければならない。
- ・ 今後の社会で必要とされていく人材は、「自分さえ良ければ良い」という考えではなく、よりよい社会、学校、家庭を創り上げるための能動的な意欲と思考力を持った者である。「自分さえよければ良い」という考えが社会の衰退を招くことは、学説では 60 年以上も前から主張されてきたことだが、少子高齢化や人口の一極集中化に歯止めのきかない中、地域活力を維持するための仕組みづくりは、今般ますます強く求められている。
- ・ ゆえに、現在強力に推進されている「社会に開かれた教育課程」、「学校運営協議会」、「地域学校協働活動」という制度や概念の導入は、切実な地方創生戦略だと言える。
- ・ 学習活動を通じて子ども達の主体性を成長させ、郷土への愛着を培い、持てる力を将来の地域づくりに還元してもらおう。そのためには、①子ども達に地域の誇りを持たせ、地域づくりの担い手に育てる、②地域と学校のつながりを強固にする、③地域課題を発見し解決に導く体験をさせる(体験型学習)という教育のあり方をセットで考えなければならない。この 3 点を推進するために、「社会に開かれた教育課程」、「学校運営協議会」、「地域学校協働活動」が、それぞれ施策として連動している。一部地域や学校では、「学校運営協議会」を立ち上げることが目標のようにとらえられているが、これは誤りである。
- ・ 本日のテーマである「地域学校協働活動」とは、地域の幅広い人材の参画を得て、子どもたちの学びや成長を支えていくとともに、学校と地域がお互いをパートナーとして連携・協働しながら学校を核とした地域づくりを目指していく活動のことをいう。具体的には、登下校の見守り、環境整備、授業補助、放課後児童教室、休日の教育活動、家庭教育の支援事業その他の様々なまちづくり活動や、地域活動等が考えられるだろう。
- ・ 各学校と地域団体の間には、既に様々な「地域学校協働活動」が存在していると考えられる。これを基盤としつつ、学校と連携・協働する諸団体の間に緩やかなネットワークを形成することによって、より幅広い人材や団体の参画を促し、かつ効率的な連携の推進が可能となる。こうしたネットワークのことを「地域学校協働本部」という。他市の例では、各地域の公民館に、「地域学校協働本部」の事務局が置かれていることがある。
- ・ 各地方自治体の教育委員会は、地域学校協働活動の円滑かつ効果的な実施を目的として「地域学校協働推進員」を委嘱できる。その主な業務には、地域と学校の橋渡し役や地域学校協働活動への助言や援助等が挙げられる。他市の例では、元 P T A 役員、現役又は元自治会役員、元教師等への委嘱が見られ、年齢層では、退職した 60 歳代の人材が多い。様々な活動内容に対し、謝金として支払われるのは一般的に年間数万円であることから、職業として成り立つものではない。よって「地域学校協働推進員」を支える動機たりうるものは、地域づくりや次世代の育成にかける「やる気」や「情熱」だと言える。
- ・ 先述したとおり、「地域学校協働活動」自体は、各学校と地域団体の中で既に存在するものである。よって、「地域学校協働活動の推進に向けた取り組み」とは、新規事業の立ち上げを意味するものではない、ということ留意されたい。既存事業の効用を高め、大人から子供までより多くの人々や団体が地域学校協働活動に関われるようにするための仕組み作りである。具体的には、地域や学校で開催される運動会、学芸会、文化祭に学校及びより多くの地域住民の参加を促して協働の場としたり、「総合的な学習の時間」や「遠足」のような学校事業に地域の人々が関われるようにしたり、ということが考えられる。

- ・地域団体に対して「協力」や「支援」をお願いするのではなく、主体的に関わってもらうようにすることで、地域学校協働活動への理解は促進される。具体的な役割を任せる、人集めを頼む、共催してもらう、事業に必要な資材の貸与や提供をお願いするなどである。時に「迷惑」だと思われそうなことを厭わず持ちかけることで、前に進んでいくものだと考えてもらいたい。伝統的な祭事や郷土芸能、歴史、文化、芸術など地域で共有されている価値観は、幅広く参加の動機を得やすく、地域学校協働活動の核として期待できる。
- ・地域学校協働活動の推進に向けて最も留意すべきは、関係者の心や気持ちの問題である。地域、学校がそれぞれどんな思いを抱えているか理解しあい、誤解や不安を解きほぐし、両サイドの事情や自己決定権を尊重しつつ、連携を進めていく必要がある。
- ・地域学校協働活動の推進することは、そこに関わる人それぞれにとってメリットがある。学校は、先生の負担軽減や教育内容の多角化が進み、地域との相互理解が深まることで関係の円滑化が期待できる。地域は、集団活動の充実によって活性化が促され、連帯感の深まりが防犯力や防災力の向上にもつながる。子ども達は、多世代間における人間関係の構築や集団行動など、今後の社会を生き抜くために必要不可欠となる様々な能力の訓練機会を得ることとなる。また、人と人が助けあい、関わり合うことは人間の幸せの一つであることから、精神的に豊かな人生を実現することにもつながると考えられる。

#### 質疑

委員 「社会に開かれた教育課程」に関し、学校にも地域にも喜ばれた具体的な活動例があれば、ご教示を願いたい。

講師 「社会に開かれた教育課程」は学校教育の理念の一つであり、それ自体に具体的な活動が伴うというものではない。当該理念に基づき実施される「総合的な学習の時間」を例にとっても、どのような活動がされているかは、学年や地域の実情によって様々である。全国の先進事例から学び、模倣しようとするのではなく、既に各地域にある素晴らしい伝統や、共有し合える魅力を活用することを考えてもらいたい。

委員 お話を聞きながら、瑞浪市社会教育委員会が進むべき道筋を思案させていただいた。「地域学校協働本部を公民館に設置している自治体がある」と例示をいただいたが、瑞浪市は、市内各地区の中で特に人口の多い3地区に固有の地区公民館が存在せず、中央公民館が地区公民館の役割を兼ねているという特殊な事情がある。こうした地域においては、「学校の中に地域学校協働本部を設置する」ことを考えたが、どのように思われるか。具体的には、放課後の空き教室の活用等を考えている。

講師 大変新鮮なアイデアだと感じる。柔軟な発想は、地域にとって貴重な資源。忌憚なく出し合っていたきたい。結論から言えば、地域学校協働本部をどこに置かなければならない、という決まりは全くない。公民館に設置した自治体の例も、「地域学校協働活動を担う人材がどこに集まりやすいか」を考えた結果だろう。大事なのは建物ではなく、組織としての機能性、そして中核として関わる人達の動きやすさである。

お礼（有賀代表より）

先生の講義を聞かせていただくのはこれで二回目となるが、今回もお話の中に迫力のよさなものを感じた。短い時間だったので、思われたことを充分お話いただけたか不安であるが、「現在瑞浪市が動き出している方向性は、間違っていない」ということが改めて確信できたし、様々なヒントもいただいたと思う。本日の講演に感謝申し上げたい。

### 3 研究テーマ（案）について

事務局 前回まとまりきらなかった案件であるが、事務局への一任があったことを受けて「コミュニティ・スクール化とともに進める地域と学校の連携・協働の在り方」という素案を再策定させていただいた。これについて、協議願いたい。

委員 「コミュニティ・スクール化とともに進める」という表現について再確認したい。一般的に「コミュニティ・スクール化」とは、学校運営協議会を立ち上げることを意味する場合があるが、瑞浪市では、学校運営協議会の設立と共に、地域と学校の連携・協働が実現されることをもって「コミュニティ・スクール化」と呼ぶという理解であったと思う。その点はよろしいか。語意の重複にはならないか。

事務局 「コミュニティ・スクール化」に沿って地域・学校の連携・協働の在り方を考えていくという意味のテーマであり、原案にはその意図を含めさせていただいている。

### 4 連絡

### 5 その他

委員 本日の講演の中で「地域課題を大人と子どもと一緒に考える機会があると良い」という話があったが、土岐地区では地域行事を開催するにあたり、中学生を含めて計画を話し合っているという話を耳にした。この瑞浪市でも、そういう動きが起き始めているということを楽しく思う。皆さんの中には、各地区のまちづくり推進協議会に参画されている方も少なくないと思うので、各地の情報を集めてほしい。

先日、「還暦からの底力」という本を読んだ。その中で特に印象的だったのは、「生物学的に見て、高齢者は（社会に）生かしてもらっている。」という考え方である。人類全体の存続を考えた時、最も根底にあるのは「種の保存」であるが、高齢者には生物学的な意味とは違う形での種の保存、すなわち知識や文化を子や孫に継承し、保存していく役割があるという。

現在、「地域と学校が協力しあう仕組み作り」が国策として進められているが、先ほどのお話にもあったように、必ずしも関係者それぞれに十分な対価を用意できるものはない。お金ではなく、心意気で協力できる人のたくさんいる町、そうした人たちを大事にできる学校、という環境が出来れば、未来に向けた素晴らしいまちづくりになると思うし、その一助を社会教育委員が担うことも厳しく求められていると思う。本日の講演の内容を、しっかりと受け止めていきたい。